

昨年の暮れ、大事なお客さまが来られて、本堂左手の襖（ふすま）をいれる機会があった。先住職が亡くなって以来、襖をいれたことはなかった。今年の十二月に七年忌を迎えるから、久しぶりのことだ。

長瀬の岩畳を写生した四枚からなる襖絵で、左から春の景色、夏の景色、秋の景色、いちばん右手の奥には雪をかぶった山がみえる。その下の方に「昭和巳亥（みのい）年初冬洛西花園大晃」と落款（らっかん＝署名）がある。

昭和巳亥は昭和三十四年のこと。五十年前のことだから、真っ白な画仙紙に書かれた風景もだいぶ時代色を帯びてしまった。いや、時代色をおびたからこそ、川の群青がいちだと鮮やかに流れている。

久しぶりにみて、こんな良い絵だったかと、びっくりする。描いたのは落款によれば、「京都の西方、花園町に住む大晃」という画家。

花園は大本山・妙心寺のある町名だ。残念ながら、画伯の詳しい経歴は不明だが、先住職の書き残したものは次のようにある。

「辻本大晃画伯は日本画家小野竹喬に師事。この襖絵を作成した当時、五十七歳。大徳寺派管長後藤瑞巖老師に参禅」

もっと丹念に調べれば、消息がわかるかもしれないのだが今だにその機会を得ずにいる。失礼を顧みずに書けば、画壇に輝かしい足跡を遺した方ではなさそう。ただ、先住職との接点は推測できる。先住職の恩師（後藤瑞巖老師）について坐禅をされていた縁で、戦災から復興した本堂の龍の絵と襖絵をお願いしたのではな



いか。

さて、久しぶりに襖をいれて、荒川の風景を目にして思い出したのは、能の創始者世阿弥（1363年〜1443年）の著作、『風姿花伝』の有名な一節だ。

「秘すれば花なり。秘せざれば花なるべからず」秘することによって、花の美しさは一段と映える。まずこれを知ることが肝要である、と。つまり、秘せねば花にならぬ。これをわきまえることが、花を考えるに当たっての大事な要点である、というのだ。

また、別のところで、こうも書いている。「桜の花がなせ美しいか」というと、一年に一回咲くからだ」。

この襖絵だって同じ事。先住職が大事にしていつも目にしていた時には気がつかなかったけれど、亡くなって七年忌を迎える頃になって、久しぶりに見てみると、その群青が目染みて作成した頃の苦勞も想像できるというもの。

今冬はこの襖をいれた本堂で年忌法要などしている。襖絵の説明をすると、法要にいられた皆さん、帰り際にじっくりと見て、いろいろな感想を述べていく。それを聞いて、この地域の人にとって、長瀬という場所は、それぞれに思い出のある身近な存在だということに改めて気がつく。

というわけで、「久しぶりにお彼岸の法要の時にご覧下さい」と書きたいところなのだ。が、彼岸法要はたくさんの方が来られるので、片付けます。

「秘すれば花なり」です。

ウダーって何だ



電子楽器ウダーの存在を知ったのは昨年の秋でした。さつそく、ウダー公式ホームページをたよりに、寺での演奏をお願いして快諾を得たのは、晩秋になってから。そして、年が明けて節分が過ぎた二月初旬、わざわざ下見にきてくれました。

約束した時間の数十分前に山門に和服を着た若い男の人が立っています。宇田道信さんです。本堂にお通しすると、手にした小粋な風呂敷に包まれた桐箱を取り出しました。自家製スピーカーです。

着流しに羽織りをまとった姿に風呂敷と桐箱。そしてカメラの望遠レンズのような直径10センチで長さ20センチほどの物体から発する繊細な電子音。それを操作するのは、坊主頭の年齢不詳の青年。桐箱は御徒町の「箱義」の特注品だという。電子楽器と和服と



東京・下町の老舗の技。和服の由来を尋ねると、「去年の暮れからふと着たくなったので、買いそろえた」とのこと。奇妙な取り合わせです。

電子楽器と聞くと、人工的なものを想像するけれど、製作者・宇田道信氏の生き方と人間性そのものがウダーです。奥深くて摩訶不思議でおもしろい。これは見るしかない。聴くしかない。

【ぶろいーる】宇田道信

大阪生まれ。大学でクラシックギターのサークルに入るが、ギターの構造・仕組みが、自分の理想とする楽器と違うと感じ始め、楽器の理想型を求めてウダーの制作を始める。そのため、大学を留年すること4年。

卒業後外資系半導体メーカーにエンジニアとして勤務するも、好待遇を捨てて独立。ウダデンシを起業。

第10回（H20年）NHKデジスタインタラクティブ部門グランプリ受賞。（Webマガジン・「エンジニアLive」より抜粋・文責は編集子にあります）

